

[大来佐武郎氏生誕100年記念フォーラム]

中国の改革開放にも助言

「グローバリストの先駆け」の実像とメッセージを熱論

外相、旧海外経済協力基金総裁などを歴任した大来佐武郎氏(1914~93)の生誕100年を記念するフォーラムが11月3日、東京で開かれた。戦後日本を代表する「グローバリスト」で、「我が心は千里に在り」との気概で世界を駆け巡った大来氏。フォーラムでは「グローバル人材の果たすべき役割とは」をテーマに、大来氏の功績と今後の日本の針路について語り合った。

渡辺利夫・拓殖大学総長は、大来氏と海外出張に3度同行した思い出があり、関係者だけが知る貴重な逸話を披露した。

大来氏は1979年に第2次大平内閣で外相に抜擢されるほど、大平正芳首相に信頼されていた。大平氏は中国の谷牧・副総理が市場経済の導入で思案しているのを知り、「日本の戦後復興のプランナーとして優れた者がいる。中国で市場経済をどう進めるか、意見を聞いたらいい」と、大来氏を紹介した。谷牧氏はその後、お忍びで何度も来日し、大来氏の自宅に足を運んだ。

中国要人が日本から助言を受けていたことが明るみに出ると好ましくないため、大来氏は「口が割けても内密にしておいてくれ」と

関係者に頼んだという。だが、渡辺さんは今、「大来さんの意見が中国の改革開放思想に影響を与えた」と想像する。

大来氏の視線はアジア全体に幅広く注がれていた。戦後間もない1952年、バンコクの国連アジア太平洋経済社会委員会(ECAFE)に勤め始め、「国連初の日本人職員」になった。日本が国連に加盟する4年前のことだ。この年、すでに「アジア経済と日本」という名の共著を出版していた。

渡辺氏は「大来さんは戦後復興のプランナーと言われるが、それと同時期にアジアへの関心を深めていた」と述べた。

大来氏は経済企画庁を退官後、(公社)日本経済研究センターの初代理事長に就任した。現在、同

センターの理事長で、経済企画庁の後輩でもある岩田一政氏は「大先輩」を懐かしんだ。

1970年に企画庁に入った岩田氏の新人研修で講演した大来氏は二つのメッセージを発した。一つは、「これから役所で働く皆さんは『T字型の人間』になってほしい」だった。「T」の横棒のように幅広い関心と開かれた心、横に広がるネットワークを持て、という意味だ。その一方、「T」の縦棒のように深く真っ直ぐ、得意分野の専門知識を持て、という意味もあった。もうひとつは「常に大学との交流を深め、一緒に仕事をしろ」だった。

「大来氏は常に10年、20年、30年先を見渡す発想の素晴らしさがあった。戦前においても、開戦後から戦後の立て直しまで考えていた」と語った。

フォーラムには日本紛争予防センター理事長の瀬谷ルミ子氏のような若い世代も参加した。コーディネーターを務めた国連広報センター所長の根本かおる氏は、「戦後70年と国連ミレニアム目標(MDGs)の最終年を来年に控え、大来氏の足跡をひしひしと感じる」と述べた。



大来氏の遺影の前であいさつする緒方貞子前JICA理事長